様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 10 日現在

機関番号：11302
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2008 ～ 2010
課題番号：20402068
研究課題名（和文） ヨーロッパにおける先天性盲ろう児の共創コミュニケーションに関する調査研究
研究課題名（英文） A survey research on European perspective of co-creating communication for congenital deafblind children
研究代表者
菅井 裕行（SUGAI HIROYUKI）
宮城教育大学・教育学部・教授
研究者番号：90290890

研究成果の概要（和文）：本研究では、ヨーロッパにおける盲ろう児の言語発達研究の最近の成果である「共創コミュニケーション」という新たなパラダイムの内容と課題について情報収集を行い、かつ我々が取り組んでいるコミュニケーション研究と比較検討を行うことを目的としている。本研究において、これまで理論構築とともに教育現場への応用研究に携わってきた英国や北欧の教育研究機関や研究者を訪問し、かつ国際盲ろう学会（Deafblind International）が主催するワークショップに参加して情報収集を行った。さらにこの研究に取り組む英国の研究者を日本に招聘し研究交流を実施した。その結果、共創コミュニケーションの基本的概念とその特徴、さらに我が国のこれまでの取り組みと共通する視点が確認された。

研究成果の概要（英文）：This study was aimed at investigating the new perspective concerning the educational theory for congenital deafblind children, co-creating communication, which has developed among the European country. The method was to collect recent information of theoretical and educational issue, and compare these contents to our research outcome developed in Japan. We visited researchers and practitioners in UK and Nordic countries, participated the conference held in Europe by DbICN, and invited two researchers to our country from UK for study meeting and workshop. The basic concept, redeeming feature of co-creating communication, and common vision to our approach, were come out.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2009 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
総　計	4,900,000	1,470,000	6,370,000

研究分野：社会科学Ｂ
科研費の分科・細目：特別支援教育
キーワード：共創コミュニケーション、先天性盲ろう、言語発達、調査研究

１．研究開始当初の背景

盲ろう児のコミュニケーション研究は、我が国においては主に概念形成から点字を中心とする言語行動の形成へと促す取り組みが始まり、その後も教育実践研究が進められてきている。一方、近年、ヨーロッパを中心に先天性盲ろう児の言語発達に関する研究が進み、新たな理論構築が試みられてきている。そこでは主に子どもが自発する身振り動作系の言語に着目しており、これらの初期言

語が養育者との間で共通の信号として成立する過程についてビデオ分析の手法を取り入れながら研究が続けられてきている。その一部は、共創（co-creating）コミュニケーションとして理論化されてきているが、まだ我が国ではその内容について知られていない。そこでこれまでの研究的蓄積を調査し、検討することが必要であった。また、筆者らは、これまでヨーロッパの研究者・実践家と情報交換を行ってきた中で、日本における特に障害の重い子どもの教育実践において、欧米に比較して身体的近接性が高いことが一つの特徴としてあげられることに気がついた。障害のある子どもに対しても椅子や机による指導環境を標準とする欧米に比して、子どもに対しては身体近接性に対する文化的タブーのない我が国の教育方法は、障害の重い盲ろう児にとって有益な場合が多いのではないかと考えている。この視点からコミュニケーション支援におけるかかわり手や働きかけの条件等について、ヨーロッパで開発されてきている理論との比較検討ができるのではないかと考えた。さらに、実際にそれらの理論が教育現場にどのように応用されているかについて明らかにしたいと考えた。盲ろう児の教育は、対象者が極めて少数であるため、この領域に携わる研究者や研究機関も少なく、それだけに国の枠を超えた連携や情報交換が必要である。ヨーロッパにおける盲ろう教育の研究者はその地理的条件を活かして、国境を越えて緊密に連絡を取り合い、共同プロジェクトを実行している。我が国にもその成果を紹介し、また本研究を通じて我が国の研究者や実践者との研究交流と情報交換への契機を提供できるのではないかと考えた。

２．研究の目的

盲ろう児教育は、障害のある子どもの教育の中でも対象者の少ない分野ではあるが、その障害の独自性からみて、その支援ニーズは極めて高く、より専門的な支援が必要とされる領域といえよう。盲ろう児は、視覚と聴覚という外界からの情報収集の窓口としてもっとも重要な器官が重複して障害されているため、行動上も発達上も重篤な障害状況を呈する場合が少なくない。盲ろう児は、自然言語の発達が見込まれないだけに、早期からの教育的支援が重要である。近年は、医療技術の進歩に伴い、より一層の障害の重度化・重複化が進んでおり、盲ろう教育においても障害の複雑化が進んできたため、これら視覚と聴覚の障害に併せて他の重度な障害をも併せ有する子どもへの対応に教育現場は苦慮している。盲ろうに加えて重度の障害を併せ有する子どもの言語発達については、近年、ヨーロッパにおいて新たなパラダイムの元で研究が展開してきている。我々は、1999年４月にパリで開催された盲ろう児のコミュニケーション研究に関する国際ワークショップに参加し、その研究の胎動期の成果の一端に触れた。そこでは従来の行動理論に基づく指導論や技法とは違った新たな研究パラダイムと課題の指摘がなされていた。その後も、われわれはヨーロッパの研究者や実践家と情報交換を行いつつ、日本という独自の言語環境および教育環境で実証的データを得る研究を続けてきている。

そこで、本研究では、ヨーロッパにおける盲ろう児の言語発達研究の最近の成果と課題について、これまで理論構築とともに教育現場への応用研究に携わってきた教育研究機関や研究者を実地訪問し、情報収集を行うとともに、われわれが実施してきた研究と比較検討を行うことを目的とする。

３．研究の方法

本研究は、主に３つの方法によって行われる。１つは、近年の共創コミュニケーションに関連する研究論文等を可能な限り入手し、解読すること。２つは、このパラダイムに基づいて研究に取り組んでいる研究機関、教育機関を実地訪問し、インタビュー調査を含むフィールド調査を行う。３つには、このパラダイムに基づく研究の中心的存在である国際盲ろう学会のコミュニケーション・ネットワークの研究者と研究交流をもち、実地訪問および招聘プログラムを実施して、相互比較を行う。その際、我が国のこれまでの研究的蓄積との比較を通して、我が国の取り組みの独自性を明らかにし、今後の教育・研究への実践的示唆を得ること目指すこととする。

４．研究成果

1. 共創コミュニケーションの概念

それまでの行動主義的なアプローチによるのではなく、アタッチメント理論と情動の役割を重視した自然アプローチによる実践を踏まえて、コミュニケーションの発生を探求することから、情動や語彙の共有が強調されるようになった。それらは、パートナーとのインタラクションをマイクロ分析する手法によって科学的に検討され、コミュニケーションが操作的に教授されて形成されるものではなく、パートナーとの共有関係の中で共創されるものであることを明らかにした。そこではダイアロジカリティーや相互主観性といった概念が用いられるようになってきている。この探求において、次のような原則が主張されるようになった。１）盲ろう者もすべての人間発達と同じ原理で発達すること、２）学習の原理においても同じであること、３）自然な環境を作り出すことの重要性、４）ホリスティックなアプローチの重要

性、の４つである。１）に関しては、コミュニケーション発達に関する基本的プロセスを踏まえ、盲ろう独自のモダリティーである触覚への注目と、家族のもつ経験知の重視を特徴とする。２）については、コミュニケーションが発生する自然な学習環境とは、パートナーとの関係性において、子どものイニシアティブに応じることから始まり、その拡張が図られること、ネゴシエーションという相互調整過程にみられるような共同性に基づくインタラクションによってもたらされるものであると考える。３）については、環境を盲ろう者がアクセス可能なものにすること、ばらばらなイベントの集積ではなく、まとまりの意味ある経験とすること、そしてコミュニケーション・パートナーが有能であることが必要となる。４）については、個人の潜在力に注目し、多感覚的なアプローチを重視し、身体的サインを含むトータルアプローチを行い、しかも生涯を通じての支援を行うこととされている。

共創コミュニケーションというパラダイムの特徴は、以下の４つの点にある。１）コミュニケーションを通じて、盲ろう者が他者とふれあい（contact）経験を共有することが重要であり、それゆえ有能なパートナーの存在が重視されること、２）盲ろう者がむける注意を共有し、表出を細かく捉えて反応することが重視される。そこでは他者と考えや思いを共有するディクララティブなコミュニケーションに重点がおかれる。３）コミュニケーション発達を多層的なものとして捉えること。その多層化はまず近接（proximity）からはじまり、基本的安心感を基盤に、第一次相互主観性から第二次相互主観性へと進む中で情動調整が進する。そして、意味の共有を通して、パートナーとナラティブを構成することを通じてコミュニケーションは対話へと発展し、社会的な意味が成立し、最終的には文化的社会的言語への移行が課題となる。このようないくつかの層が積み重なっていくものと捉えられている。４）このような多層化のために、盲ろう者とパートナー双方が能動性を持ち、相互性が保たれていることが重要である。

２．欧州における取り組み

共創コミュニケーションというパラダイムは、国際盲ろう学会（Deafblind International）のコミュニケーション・ネットワークという研究グループ（DbICN）が牽引役となって展開されてきた。それは1996年にパリのシュレーヌを会場に開催された第１回のコースに始まり、1999年、同じくパリ、シュレーヌでの第２回コース、そして2008年のイギリス、リーズでの第３回コース、2010 年の再びシュレーヌでの第４回コースにおいて、発展してきている。また、この歩みの中で、オランダ・グロンニンゲン大学に、はじめての盲ろう領域に特化した大学院修士コースが開設され、かつてヨーロッパのみならず米国も含めて盲ろう教育の理論的支柱であったヴァン・ダイク・アプローチを生み出したオランダのろう学校の研究的遺産がこの新設コースを支える形で一つの研究拠点を作り出してきている。これまでの取り組みの流れは、４回のコース内容に色濃く反映されており、その足跡をたどることが可能である。先天性盲ろう児とのコミュニケーションをどのように捉えるかをテーマにして、それまでのアプローチ（先のヴァン・ダイク・アプローチを含む）を超克していく視点が提起されることから始まっている。次にコミュニケーションの発生がテーマとなり、語彙や意味の共有を生み出すプロセスとしてネゴシエーションといった観点が持ち込まれる。ここで、パートナーとの共同的な関係、自然なアプローチの必要性が取り上げられ吟味される。そして、次に言語学や社会学で扱われるダイアロジカリティーの概念が持ち込まれ、共創コミュニケーションの概念がより一層深められていく。この時期にグロンニンゲン大学のスタッフを加えての研究成果のとりまとめが４分冊の概論書として発行され始めた。そして、さらに「対話（dialogicality)」をキーワードにして、先天性盲ろう者のコミュニケーション研究の方略が示されてきている。この流れの中に特徴的にみえることは、近年の発達心理学の知見、言語学や言語心理学の最新の知見を積極的に活用し、取り込もうとしている点である。これら幾種かの専門分野との交流を通じて、触覚がベースとなる先天性盲ろう者のコミュニケーションが、感覚障害という狭い枠内でだけ語られるのではなく、より広い関連諸科学との対話が可能な研究領域であることを示そうとする意欲が大変強くあるといえる。それは同時に、研究の地平の拡がりだけではなく、障害観、人間理解、発達理解における一つの明確な方向性を打ち出すことにもつながっていると思われる。

３．我が国における実践研究との比較について

筆者らは、これまでヨーロッパの研究者・実践家と情報交換を行ってきた中で、日本における特に障害の重い子どもの教育実践において、欧米に比較して身体的近接性が高いことが一つの特徴としてあげられることに気がついた。障害のある子どもに対しても椅子や机による指導環境を標準とする欧米に比して、床面や畳上での直接的な身体接触を中心とする教育的係わり合いを当然視してきた我が国において子どもに対しては身体

近接性に対する文化的タブーは少ない。先天性盲ろう児の教育において、触覚を中心とする接触型コミュニケーションの発達は重要な内容であり、そのための教育方法には、何らかの身体接触が欠かせない要件となる。この点において、タブーの少ない我が国の教育方法は、障害の重い盲ろう児にとって有益な場合が多いのではないかと考えた。この視点からコミュニケーション支援におけるかかわり手や働きかけの条件等について、二人の研究者を日本に招聘して開いた研究交流会で意見交換を行った。我が国から提供した研究資料について、そこに見られる身体性はヨーロッパでは長い間タブー視されてきたことであり、最近になった盲ろう研究の分野でようやくその必要性が一部の研究者や実践家に認識され始めており、日本の実践が大いに示唆を与えるものであるとの指摘を受けた。さらに、提出された資料では子どもイニシアティブの徹底が際立っており、これも見習うべき点として言及された。触覚を基盤とするコミュニケーション生成においては、身体接触の受容と、接触を通じた活動の共同化を通じて、イベントを共有していくことが、重要であり、我が国の文化的背景にはそれを積極的に評価する観点があることが示唆された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
① 土谷良巳、欧州における先天性盲ろうの子どもとの共創コミュニケーション、上越教育大学特別支援教育実践センター紀要、査読無、17 巻、2011、1-11.
② 菅井裕行・金森光紀　エマヌエル症候群児に対するコミュニケーション支援の試み、宮城教育大学特別支援教育総合研究センター紀要、査読無、5 巻、2010、2-17
③ 土谷良巳、先天性盲ろうの子どものコミュニケーションにおける係わり手との関係性−接近・回避の文脈に視点をおいた弱視難聴二事例による考察−、上越教育大学特別支援教育実践センター紀要、査読無、15 巻、2009、15-21.
④ 菅井裕行、身体接触を拒む盲ろう児とのやりとり形成の試み、障害児教育学研究、査読有、 2008、vol.12、50-63

〔学会発表〕（計４件）
① 土谷良巳、菅井裕行、岡澤慎一、中村保和、笹原未来、ヨーロッパにおける先天性盲ろう児との共創コミュニケーション研究、日本発達心理学会第２２回大会、2011 年 3 月 27 日、東京学芸大学
② 藤原結香・菅井裕行、弱視難聴児との会話の質的変容を目指した実践研究，日本特殊教育学会第 48 回大会、2010 年 9 月 18 日、長崎大学
③ 菅井裕行・金森光紀、エマヌエル症候群児に対するコミュニケーション支援の試み（１）感覚機能評価と行動観察に基づくコミュニケーション支援に向けて，日本特殊教育学会第 48 回大会、2010 年 9 月 18 日、長崎大学
④ 菅井裕行、中村保和、柴田保之、土谷良巳、先天性盲ろう児へのコミュニケーション支援、日本特殊教育学会第 47 回大会、2009 年９月 20 日、宇都宮大学

〔図書〕（計０件）
〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
菅井 裕行（SUGAI HIROYUKI）
宮城教育大学・教育学部・教授
研究者番号：90290890

(2)研究分担者
土谷　良巳（TSUCHIYA YOSHIMI）
上越教育大学・特別支援教育実践センター・教授
研究者番号：00142000

(3)連携研究者

柴田保之　(SHIBATA YASUYUKI)
國學院大學・人間開発学部・教授
研究者番号：60196433

中村　保和 (NAKAMURA YASUKAZU)
群馬大学・教育学部・准教授
研究者番号：60467131

岡澤　慎一 (OKAZAWA SHINICHI)
宇都宮大学・教育学部・准教授
研究者番号：20431695

笹原　未来 (SASAHARA MIKU)
福井大学・教育地域科学部・特命助教
研究者番号：90572173